# フランス17世紀ジャンセニズムJansénisme の影響下における女性の装いについての批判

## De l'abus des nudités de gorge

小泉友美 KOIZUMI Tomomi

# 目次

フランス 17 世紀ジャンセニズム Jansénisme の影響下における女性の装いについての批判 むき出しの喉の濫用について Del'abus des nudités degorge . 1

# フランス 17 世紀ジャンセニズム Jansénisme の影響下における女性の装いについての批判 むき出しの喉の濫用について Del'abus des nudités degorge

フランス 17 世紀ジャンセニズム Jansénisme の影響下における女性の装いについての批判
" むき出しの喉の濫用について De l'abus des nudités de gorge"
Abbé Jacques Boileau ジャック・ボワロー (1677 年刊行)
宗教と心身観　第一部

ジャンセニズム Jansénisme は 17 世紀に流行したキリスト教精神史の一派であり、清貧主義を貫いて教皇権と王権、イエズス会に激しく対抗して、人間の意思の力を軽視して、腐敗した人間本性の罪深さ (原罪の重要性) を強調しました。後に、異端思想とみなされました。

ジャック・ボワロー ( Jacques Boileau 1634-1716) はルイ 14 世 (1643-1715) 統世の大世紀 (グラン・シェークル Grand siècle) を生きた聖職家であり、パリ・ソルボンヌ大学で神学博士号を取得して、数多くの異なるペンネームで著作を出版しました。ジャック・ボワローは 1 世紀の禁欲主義・正統キリスト教神学に関心を持ち、特にラテン・キリスト教神学者、チュニジア生まれのテルトゥリアヌスの引用をするのを好みました。この 1677 年に刊行されました" むき出しの喉の濫用について De l'abus des nudités de gorge" の著作は、フランドル地方を旅している一人のフランス人紳士が、旅行中に擦れ違ったフランドルの女性達の装いが、肩と喉がむき出しの状態であり、この習慣をキリスト教倫理に逆らう恥ずべきものとして批判しました。ジャック・ボワローはフランス 17 世紀グラン・シェークル (Grand siècle) の教会に集うキリスト教女性信者の mondanité(世俗性) の装いを過激に批判しています。社交界の礼儀作法と対立している宗教的典礼 (cérémonies religieuses )
は、世俗の虚栄のみせびらかせでも無く、官能的に奔放であってはならないとして、ジャック・ボワローのキリスト教スピリチュアリティー倫理とは、傲慢さ (orgueil), 虚栄 (vanité), 欲望 ( désir), 快楽 (plaisir) は聖域においてあってはならないと説きました。この批判精神は、次の時代のフランス革命の訪れを予知させる啓蒙時代 (le siècle des Lumières) の影響を感じさせました。

De l'abus des nudités de gorge
Abbé Jacques Boileau (1677)

17 世紀フランスにおいてキリスト教の教会や聖堂は多くの人々が集まる社交場としての広場 Agora の役割をしていました。その広場では、人々との出会い (集い)、会話、または煩悩 (concupicence - privées) の溜まり場となりました。ジャック• ボワローにとって教会とは聖なる場所であり、ミサの祭礼中に多くのキリスト教信者達が集中せずに、座っている者、佇む者、おしゃべりする者、常に教会内を歩きまわり、行ったり来たりして落ち着きなく、目はきょろきょろと落ちつかずに、ぼんやりうわの空で、祈りに集中していない信者を批判しています。ミサにおいて若い男性は絶えず欲望の対象 (l'objet de sa passion ) を探し求めます。若い女性はもったいぶった虚栄を装って (le pompeux attrait de vanité),
その着飾った悦び (le plaisir) を通して敬虔さ (la piété) を乱してしまいます。教会において、若い娘は貧しき人々に施しをする風で、まるで舞踏会に行くように着飾って行きます。他人の好奇心を煽り立てて、その贅沢さを見せつけます。慈愛を持つ人は純粋さ la pureté を持って生きなければなりません。

I 章
キリスト教信仰においての敵は世俗の習慣であるとジャック• ボワローは指摘して、この世界はいつも悪魔の精神によって動かされているといいます。(le monde suit toujours l'esprit du démon) よって、敬虔なキリスト教信徒は咎めなくてはならず、この咎めとは嫌悪 aversion を持って対処しなくてはならないといいます。

Il 章, lll 章, lV 章と XXXV 章
教会に集う美しい女性 (les jolies demoiselles) は首はむき出して (la gorge à découvert), 耳、腕もむき出し、恥ずべき女性の魅力を見せびらかすままに (honteux de funestes appas) しているといいます。
女性の裸体は犯罪であり、この悪はあまりにも大きく、伝染するもの (si contagieux) であるといい、この毒がすべての場所へと広がってゆくといいます。よって、社交界の好む女性の裸体を大胆に非難しなくてはならないといいます。(Que le monde approuve les nudités en la personne des femmes, nous pouvons donc hardiment les désapprouver)
ジャック• ボワローは教会内のみならず、個人的な邸、舞踏会、路地、散歩道においてのむき出しになった喉は身の毛がよだつ無謀さ (une témérite effroyable) であり、キリストを罵る行為 ( insulter) といいます。
教会とは、天使達が畏れと敬いを持って仕える聖卓において破廉恥な仕草 (immodeste), 恥知らずで (impudente), 淫乱 (lassive) なものがあってはいけません。俗世はこの混乱性を称賛しており (le monde applaudisse à le désordre), この無秩序な日常において沈黙をどう守る事が出来るのか、わからなくなる事があるといいます。

この 4 段階にわたる罪とは

- 私達が共謀する事 ( nous y consentons)
- 私が為す事 (nous le faisons)

- 私が執着する事 (nous y persévérons)
- 罪は自分自身で赦してしまう事 (nous excusons et nous défendons notre péché)

に由来しており、この主な 3 つの罪とは、

- 思い (pensée)
- 行動 (action)
- 習慣 (habitude) から来るといいます。

Vll 章

ジャック• ボワローは使徒パウロの引用を使って、しどけない装いでカミの家 (教会) を訪れる女性達を咎めています。

" 婦人は慎ましい身なりをして、慎みと貞淑を持って身を飾るべきであり、髪を編んだり、金や真珠や高価な着物を身につけたりしてはなりません。"

使徒パウロはすべての病気を治しました。すべての女性達は教会へ行く時に、質素な服をまとって、慎み深く (ornées de pudeur), 禁欲的で (chasteté), 宝石や黄金は身につけません。

女性キリスト教信徒達は、その敬虔な信仰を確認させる為の慎み深い装いをしなければならず、それは神聖な印 (la marque de la sainteté) であると言います。

VIlI - lX 章

社交界の女性達の盲目 (aveuglement) とは、虚栄の囚人になる事であり、教会に半裸状態のしどけない装いで訪れる事は、カミの家であり聖域である教会に、まるで舞踏会に来る様な装いで訪れて、男性達を誘惑する為に、または女性自身の官能性を満足させる様である。女性達はカミと男性達を攻撃する為に教会に訪れるのであろうか?

詩篇 69 の" 荒布を衣とすれば、それは私への嘲るの歌になります"

ジャック• ボワローにとってこの 17 世紀は放蕩の世紀 libertinage du siècle であり、聖域を汚すものであり、本来教会という聖域は祈りと慎み深い悔悛の場所でなくてはならないと批判しています。

XVI 章

カミの家 (la maison de Dieu) に訪れるキリスト教信徒達にとって、女性達を見る事は罪であり、様々な対象を見る事を控えなくてはなりません。( s'abstenir de regarder les objets qui l'environnent)

その心はきょろきょろとする視線につられてはなりません。(son cur ne suive ses regards)

"フィリポの信徒への手紙 4, 5" 曰く" あなた方の謙虚さがすべての人に知られるようになさい。主はすぐ近くにおられます。" の謙虚さを実行するには、外部の影響から遠ざかる無関心さが必要です。特に、好奇心の視線を向けてはなりません。

XVII - XVIII -XIX 章

旧約聖書" サムエル記下 11,2-4"にある、イスラエルのダビデ王が宮殿の屋上から水浴する一人の女性 (バテシバ ) を見そめて、強引に関係を持ち、その結果バテシバはダビデ王の子を妊娠してしまいました。ジャック・ ボワローは、この引用を土台として、ダビデ王の視線による姦淫の罪を指摘しています。( David peche pour avoir été trop libre en ses regards) この視線による罪とは、キリストの使徒達は美しい女性を見つめてはならない事から来ています。何故ならば、キリスト教徒はまず魂の美しさを評価して、肉体は厭わなくてはならず、女性の美しさを凝視すると、魂が汚されるといいます。

XXIII - XXXIII 章

ジャック・ ボワローは、すべての女性のむき出しとなった胸、肩、腕は悪魔の居場所とみなしています。虚栄の精神 un esprit de vanité, 欲望 concupicence, 自尊心 amour - propre はカミにとって心地良いものではありませんが、キリスト教の信仰は禁欲化し、謙虚にして、おのれを憎ませるものと言います。よって、キリスト教女性信徒は、その恥じらい (pudeur) と謙虚さを態度によって体現しなくてはならず、このすべての虚栄の世 (la gloire du monde) 無駄 (vaine) で軽蔑 (méprisable) すべきものであるといいます。

LXX 章

ここで、ジャック・ ボワローは、“テモテへの手紙 2,9-10” (婦人は慎ましい身なりをして、慎みと貞淑さをもって身を飾るべきであり、髪を編んだり、金や真珠や高価な着物を身につけたりしてはなりません。) の引用より、社交界の女性は ( une femme mondaine) はむき出しの喉をさらして町を歩き、罪深き贖罪の女 (le modèle des pécheresse) となる事を批判して、特に宮廷人 (courtisans)
の悪の信仰とは、へつらい (la cajolerie), 好意 (la complaisance) そして親切 ( la galanterie ) によって形成されて、女性の美しい胸への誘惑と賛辞 la louange à la beauté du sein につながるといいます。
また、装いへの批判は、聖書の" ローマの信徒への手紙 6,13" (あなた方の五体を不義の為の道具として、罪に任せてはなりません) より、女性の身体は、キリスト教の信仰において、恥じらいと義の道具という表現がされています。

最後に、ジャック・ ボワローは、18 世紀啓蒙主義の訪れを予感させる理性の光 (啓蒙主義) Lumière de la raison, 恩恵 la grâce, 栄光 la gloire を綴ってこの著作を終えています。過激な批判表現と、批判精神によって構成されたこの著作は、17 世紀に生きるキリスト教の少女と女性の有益性の為に書かれたといっています。
17 世紀のジャンセニズムのキリスト教倫理の厳格さが、女性の原罪の存在という捉え方と、その当時の華美な女性の装いへの批判を通して、ひしひしと感じさせられます。

終

フランス　アンジェ Angers 祈

フランス17世紀ジャンセニズムJansénisme の影響下における女性の装いについての批判

著　者　　小泉友美 Koizumi Tomomi

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社